HOKUGA 北海学園学術情報リポジトリ
学校法人北海学園
北海学園大学
北海商科大学

タイトル	喪失という希望：“The Long Way Out”と夢の変遷
著者	松浦，和宏；MATSUURA，Kazuhiro
引用	北海学園大学学園論集(187)：67-74
発行日	2022-03-25

Hokkai-Gakuen Organization of Knowledge Ubiquitous through Gaining Archives.

喪失という希望：“The Long Way Out”と夢の変遷

松　浦　和　宏

はじめに

F. Scott Fitzgerald の短編“The Long Way Out”（1937）では，夫が迎えに来る日を主人公が待ち続けている。しかし，彼女の夫は交通事故により既にこの世に存在せず，二人が再会出来る日が訪れることはもはやあり得ない。にも関わらず，主人公にとって，夫の到来を待つことは希望そのものである。その反面，語り手にとって，いつか来る日を待ち続ける主人公の姿は牢獄に収監されている囚人の姿と重なり合うものとして描かれており，希望を抱き待ち続けることが否定的に描かれているようにも見える。

Fitzgerald の作品にとって極めて重要な鍵概念である“希望”や“夢”が，このように“The Long Way Out”には従来の作品とは逆のベクトルで描かれている。この差異はどこから・何からもたらされており，どのような効果を作品に与えているのだろうか。そして，この概念は作者の中でどのように変化していったのか。Fitzgerald 最晩年の作品“The Long Way Out”を軸に据えて，その他の作品との関連性にも目を向けながら，彼の作品中に描かれる希望や夢の変遷を考察したい。

1.

The Great Gatsby（1925）で主人公を突き動かしていたものは，“光り輝く何か”だった。Daisy が象徴する富，上流階級，名声が，Gatsby を常に駆り立て続けた。ここで詳細を論じるのは避けるが，彼の最優先課題は Daisy そのものではなく，Daisy に備わっている燦々と輝く何かを，記号的な富を手に入れることだった。それこそが，彼の夢そのものだった。その夢を再度，そして今度こそ永遠に手中に収めるために，好機の到来を数年に渡って待ち続けていた。同じく光り輝くものに向けられる羨望の眼差しは，*The Great Gatsby* 以前に短編“Absolution”（1924）でも既に描かれている。*The Great Gatsby* に登場する富や名声を表す光は“Absolution”の中にも同様の形で登場する。Christiane Johnson によると，世の中にある“the light and glitter”を表すメタファーとして，Fitzgerald の作品中にも頻繁に登場しているという ── “There two metaphors, here only suggested, appear frequently in Fitzgerald’s works, and they are used in contexts that make them positive and desirable. In ‘Absolution,’ the lights of the amusement park suggest to the young

Rudolph a fuller and more beautiful life than that imposed by his rigidly religious father" (239)。

"光り輝く何か"としての夢や希望を動力源とする登場人物が描かれている作品は，*The Great Gatsby* や"Absolution"だけではない。Richard Lehan の言葉を借りるならば，*The Great Gatsby* の"satellite" (12)とも言うべき短編"Winter Dreams" (1922)では，主人公 Dexter Green にとって Judy Jones は長年の"夢"だった。彼が幼い時にキャディとして働いていたゴルフコース上で Judy を偶然見かけ，彼女の美しさに強い衝撃を受ける。それ以降，Judy の残像は彼の中に潜在し影響を与え続ける夢そのものとなる —— "It is not so simple as that, either. As so frequently would be the case in the future, Dexter was unconsciously dictated to by his winter dreams" (220)。それと時を同じくして，Dexter は無意識的に彼の人生を賭してその夢を追い求め続けることになる。互いに成長した Dexter と Judy は，偶然の再会をきっかけに関係を積み重ねるものの，その関係は長くは続かなかった。二人の仲が破綻したことで，Dexter に内在する夢は彼の中から消えていく。物語の最終盤，かつて Dexter の目を眩ませ続けた Judy の輝きが，既に力を失ってしまったと言う噂に不意に遭遇する。そして彼は，自分が既に夢を失ってしまっていたのだと言うことに事後的に気が付く —— "For he had gone away and he could never go back any more. The gates were closed, the sun was gone down, and there was no beauty but the gray beauty of steel that withstands all time. Even the grief he could have borne was left behind in the country of illusion, of youth, of the richness of life, where his winter dreams had flourished. 'Long ago,' he said, 'long ago,' there was something in me, but now that thing is gone. Now that thing is gone, that thing is gone. I cannot cry. I cannot care. That thing will come back no more" (235–36)。

同時期の短編"The Diamond as Big as the Ritz" (1922) —— ダイヤモンドという文字通り光り輝くものについての物語 —— でも，同様のテーマが描かれている。主人公 John Unger の信条は，富を一途に崇拝することだという —— "The simple piety prevalent in Hades has the earnest worship of and respect fir riches as the first article of its creed — had John felt otherwise then radiantly humble before them, his parents would have turned away in horror at the blasphemy" (186)。そんな彼が，世界一の大富豪を親に持つ少女 Kismine を通して手に入れようとする光り輝くダイヤモンドや富の力は，輝かしい将来の夢や希望を具現化している象徴に他ならない。それは，この少年がダイヤモンドさながらに光り輝く夢や未来について独白した直後に，森の奥から初めて姿を現す少女が証明してくれる —— "He was enjoying himself as much as he was able. It is youth's felicity as well as its insufficiency that it can never live in the present, but must always be measuring up the day against its own radiantly imagined future — flowers and gold, girls and stars, they are only prefigurations and prophecies of that incomparable, unattainable young dream" (195)。それゆえに，巨城を文字通り土台から支えているダイヤモンドや，他の富や宝石が大爆発によって一つ残らず地上から消失した時，Kismine が彼の傍にいるにも関わらず，彼の手元には"disillusion"だけが残るのだった —— "I don't know any longer. At any rate, let us love for

a while, for a year or so, you and me. That's a form of divine drunkenness that we can all try. There are only diamonds in the whole world, diamonds and perhaps the shabby gift of disillusion. Well, I have that last and I will make the usual nothing of it”（216）。

その数年後に出版された“Babylon Revisited”（1931）の主人公 Charlie Wales は，連続する不運の末に愛娘の親権を失ってしまう。そんな彼が，数々の困難を乗り越え生活を立て直し，娘を迎え入れようとするのは，娘を自らの未来そのもの，つまり希望を体現する存在として認識しているからだ。その未来を再度手に入れんと，残された時間の少なさを痛切に感じながら，断ち切られた親子関係を回復させようと試み続ける。しかし，未来への希望を追い求める彼の前に，文字通り過去の亡霊たち“Sudden ghosts out of the past”（164）が立ちはだかる。結局過去の残像の妨害によって娘の親権は手に入らず，次の機会を待ち続けることを強いられる。物語の最後はこれからも繰り返し続く希望への挑戦が暗示される ── “He would come back some day — they couldn't make him pay forever. But he wanted his child, and nothing was much good now, beside that fact. He wasn't young anymore, with a lot of nice thoughts and dreams to have by himself. He was absolutely sure Helen wouldn't have wanted him to be so alone”（177）。

このように Fitzgerald 作品において，夢や希望は手に入れるべきもの，最終的に満たされるべきものとして描かれており，多くの作品で登場人物たちはそれをオブセッション的に追いかけ続ける ── それはつまり，目標となるものをまだ手中に収めてはいないことを意味している。不足が生み出す充足への渇望，喪失を回復することへの欲求，空白を満たすことの追求，小さなものから大きなものへ，閉鎖的な空間から解放された場所への眼差し，決して尽きることのない無限への希求，このような無から有への変化，内から外への願いが夢や希望を追い求める動力となっている，とも言える。それでは，空白を埋める，もしくは埋めようとすることで生まれる希望ではなく，不在から生まれる希望，逆説的な充足はないのだろうか ── つまり，囚われた心身や，欠損や空白が生み出す希望や夢は，Fitzgerald 作品の中には存在しないのだろうか。後期の作品を考察し，希望の描かれ方や作用の仕方の変遷を辿っていきたい。

2.

どこかに存在する何か・誰かの到来を待つのではなく，失ったものの回復を敢えて遠ざけ，空白状態のままにすることで均衡を維持しようする物語。“The Long Way Out”は，他の Fitzgerald 作品に描かれる希望や夢とは逆のアプローチが用いられている。不在を継続して再現し続けることで，自らの希望や夢が崩壊するのを未然に防ごうとしている。本作品は，ある医者が精神の病で入院している女性 Mrs. King について語っていく。若くして精神の病を患った Mrs. King だが，彼女の病状は徐々に恢復する。そして，待ちに待った夫と短期間の旅行に行けるまでになる。医者の見立てによれば，この旅行は彼女にとって回復のきっかけとして，言い換えるなら未来に対する希望の象徴として，以前から待ち望んでいたものだった ── “When she ‘went under,’ she

tied up this trip with the idea of getting well. If we took it away she'd have to go to the bottom and start over" (253)。

しかし，Mrs. King を迎えに病院に向かう途中，彼女の夫は交通事故に遭ってしまう ── この時点で，彼女の主治医には，彼女の夫が長くは持たないことが既に判明している。それでも主治医は，この事実が回復途上の夫人に背負い切れるものではないと判断し，夫は誰かに呼び出され彼女を迎えに来ることができなくっていると説明し，婦人の反応を見てから真実を伝えるという方法を採用した ── "That night her husband died and at a conference of doctors next morning there was some discussion about what to do — it was a risk to tell her and a risk to keep it from her. It was decided finally to say that Mr. King had been called away and thus destroy her hope of an immediate meeting; when she was reconciled to this they could tell her the truth" (251)。それ以降，夫人は毎日決まった時刻に同じ服装で病院の玄関に向かう。彼女の主人が迎えにやって来るのを待つためだ。ここでは，彼女の夫は生死の中間にペンディング状態となっている ── 死んだのではなく，どこかに存在し生き続けている，という状態。彼も彼女を待ち続けているという位置に持っていくことで，Mrs. King も同時に生きながらえることができるのだ。

この世から去ったのではなく，この世のどこかに存在し続けるストーリーは，後期の Fitzgerald 作品にも時折顔を出している。例えば，作家三部作の"Author's House"にも死者をそのようなかたちで"登場"させている。作家のもとに届く読者からの手紙の中に，その作家の作中の登場人物が，生き別れの兄弟なのではないかとの問合せが混在している。この手紙に対して，作家は，兄弟は絞首刑になるはずだったのだが，その状況から逃れ，今は中国で暮らしていると伝えている (138)。このように死者や喪われた者が作品中に積極的に描かれる構図は，例えば Michael Breitwieser が Fitzgerald 作品全般に向けて指摘するような，作家の人生における死や死者の影響が大きいと思われる[1]。しかしここでは，登場人物が何故，到来しない人物を待ち続け

[1] Jonathan Schiff は，喪失や喪についての主題が，作品を描く上で必要な洞察を Fitzgerald に提供したと指摘している。

> Fitzgerald wrote about a constellation of various mourning patterns from his. childhood: his parents' alternate preoccupation with grief or his two elder sisters and displacement of their grief onto him, behavior that in turn encouraged his sense of maternal and paternal loss, but also his identification with their grief. Furthermore, these circumstances contributed to his literary insights into cultural mourning norms. (13)

また，Fitzgerald 作品における死者の主題について最も詳しく論じているのは，Michell Breitwieser だろう。Breitwieser は，Fitzgerald の伝記的作品と言われる作家三部作を考察し，この物語を喪失が占めていると指摘する ── Fitzgerald は，生まれる前に既に二人の姉を亡くしていた。その喪を担っていた母親を亡くしたことで，引き継ぐべき喪が宙吊りとなってしまう ── 喪の不可能性が作者を苛み続けていた。そしてその負可能性が，いわばオブセッション的にこの作家を動かし続けていたという。

> Rather than a lost thing, a thing never had, and therefore a sense of lacking. without the ability to know what it is that lacked. . . If, as Freud suggests the work of mourning lies in the incremental construction in

るのかに着目し続けたい。

このように，“The Long Way Out”では待ち続けることと希望や夢が密接にリンクしている。この点は，これまで本論でも見てきた。しかし，他の作品と異なり，この行為がネガティブなものとして描かれているのは注目に値する。Mrs. King のエピソードを聞いていた語り手は，この話を中世の監獄に収監される拷問と併置している[2]。希望のために待ち続けることは，従来の作品では明るい将来の到来を予告するものだった。例えその先に待ち構えているのが，“The Diamond as Big as the Ritz”で John が言うところの“disillusion”だとしても[3]。しかしながら，“The Long Way Out”のそれは，これまでとは雰囲気が異なる。待ち続けることは，明るい未来や夢を意味するのではなく，辛く過酷なものとして描かれている。一人残された Mrs. King は，この先も病院で生涯同じ行動を繰り返すのだろう。毎日同じ時間帯に同じ服を着て，来るはずのない夫を玄関に迎えに行き彼を待ち続ける。毎年帽子の更新は行われるが，服は最初と同じものを着続けるのだろう。もちろん，このルーティーンが唯一彼女の希望を下支えするものであることなのだが，それに対する医者の一言は，彼女の暗い先行きを指し示している ── “The doctor ended his story here, rather abruptly. When we pressed him to tell what happened he protested that the rest was anticlimax — that all sympathy eventually wears out and that finally the staff of the sanitarium had simply accepted the fact” (253)。希望を抱いて待ち続けることが，まるで悲劇のように描かれている。

希望の描かれ方は，何故この様に大きく変化したのだろうか。本短編の先行研究を紐解けば，この先品が描かれた時期，Fitzgerald は妻 Zelda との関係に大きく悩んでいた。言うまでもなく，

---

conscious memory of an adequate representation of the lost thing, a representing that delineates a re-presenter who survives, then the inheritor of mourning is doomed to an inability to mourn — a true inability, not a deep or insurmountable unwillingness. (253-54)

本論では割愛するが，このように Fitzgerald 作品に喪失が頻出することも，重要なポイントであると言える。既述の通り，彼の多くの作品では空白を埋めようとする。空白，すなわち喪失と言い換えても問題ないだろう。その空白や喪失を埋め合わせるもの，それが本論も照準を合わせている希望や夢であり，その夢や希望と空白が噛み合わずにずれを生み出してしまう。この空白が Fitzgerald 作品に描かれる主人公たちの悲劇的なエンディングにつながっていることは，この作家と喪失と夢・希望のテーマを考える際には注目に値するだろう。

[2] この物語の冒頭で，語り手は土牢の話題を耳にして，閉所恐怖症が疼く。狭い場所に閉じ込められるのは，我慢ならないし，そのような場所についての話を聞くだけでも辛い，という。そんな時，友人の医者がある患者の話を始めてくれたことで，語り手はほっとする。話題が変わったと思ったのだ。しかし，医者の話がエンディングを迎えた時，語り手にとって，訪れることのない機会を永遠に待ち続ける Mrs. King の終わることの無い物語は，むしろ土牢のようなもの，いや，それ以上の苦痛を思い浮かばせるものとして併置されている。

[3] “The Long Way Out”を執筆した際の Fitzgerald について言及する James L. W. West Ⅲの指摘よれば，“The Long Way Out”はそもそも“disillusionment”の物語だということになる ── “Fitzgerald was so pleased by the wide response to his essay that he decided to explore the topic of his personal disillusionment further” (155)。もちろん，この物語の表面上のストーリーだけを見れば，この指摘に素直に納得できる部分もある。しかし，と同時に，この物語が“disillusion”一色だったのかというと，本論が指摘するように，物語の中に希望の断片がいまだに見え隠れするだけに，それも腑に落ちない。

Zelda 自身も精神を病み，発病後は生涯に渡って入退院を繰り返すことになる。ちょうどこの時期は，Zelda の調子が特に悪いタイミングだったようだ。このような伝記的な情報をそのままトレースするならば，病気がなかなか治癒しない Zelda を目の前にして，自らも健康に問題を抱え始めていた Fitzgerald 自身も，これまでの考え方に変更を迫られていた[4]。夢や希望を抱きその到来を待ち続けることに懐疑的になっていた，その移り変わりが彼の作品にも明確に投影されていた，とも解釈できるだろう。

さはさりながら，この作家が希望や夢に対する肯定的な見方を完全に放棄したとも考えられない。というのも，この後に彼が最後の長編 *The Last Tycoon* に渾身の力で取り組み，再起への道を探り続けた。ハリウッドで映画のシナリオライターとして働く自らの姿を自虐的な内容で描写する Pat Hobby ストーリーズはどうだろうか。Pat が失敗を繰り返しながらも泥臭く生き抜いていることを考えれば，West が指摘しているように，物語を書くことを通して自らの境遇を客観的に俯瞰していたようにも見えるのだ。ここで Fitzgerald を動かしていたのは，Lehan も指摘しているように，作家としてまだやり残した何かだったのではないだろうか；

> Pat hates pretensions, refuses to take himself seriously, and is not taken. Seriously in return. He lives off the fat of the system, off its waste, its debris. The idea here is more significant than the artistic achievement, and in an inchoate way Fitzgerald was showing that survival had its merits. But Pat's survival is at the expense of a heightened conception of self, and Fitzgerald had come a long way from the genteel and romantic hero, from the homme epuise and the Faustian prince. He could not give up easily his belief that such heroes were necessary despite the shoddy world that destroyed them. Even Pat Hobby can warm to a romantic occasion. In his last years Fitzgerald seemed to toy with two very different conceptions of self – and two different calls to fate. Survival was not enough. If the modern air would not sustain heroic flight, the attempt to fly was still worth the effort. (21)

であるならば，Mrs. King の主治医たちが最後に放った“いつか夫が実際にやって来る可能性がまだある”という言葉は，全ての可能性を放棄するものではなく，むしろ暗闇の中でほんの僅かに光を放つ希望，とも解釈できないだろうか —— “There's always the chance," said Dr. Pirie, "that someday he will be there" (253)。そして，次の言葉も投げやりな発言とは到底思えない —— “The

[4] 作品が描かれたと予想される時期を考えれば必然的なことかもしれないが，“The Long Way Out”は，Zelda の病と結びつけられて論じられることもある。例えば，Kenneth Eble は，以下のように指摘している —— “It was Fitzgerald's most ambitious attempt to explore mental illness, though concentrated on Zelda's specific condition. “The Long Way Out” is the one piece of short fiction that confronts mental illness as Zelda was experiencing it” (50)。

nurses manage to substitute a new hat every year or so but she still wears the same suit. She's always a little disappointed but she makes the best of it, very sweety too. It's not an unhappy life as far as we know, and in some funny way it seems to set an example of tranquility to the other patients”（253）。

3.

興味深いことに，最晩年の Fitzgerald が描いた他の作品でも，希望や夢が同じように描かれている。例えば，“Three Hours Between Planes”（1941）は，飛行機の乗り継ぎ時間を利用して，子供時代に片思いの関係だった女性 Nancy に Donald Plant が会いに行く。再会を果たし，二人の思い出話にも自ずと花が咲く。幼い時に自分から一方的に Nancy に想いを馳せていたと Donald は思っていたのだが，Nancy も Donald の存在をずっと気にしていたと告白する。それを真に受けた Donald が“Wouldn't it be awful if we fell in love again?”（576）と言うほど，二人の関係は静かに，しかし加速度的に盛り上がっていく。Nancy と彼女の夫の関係がぎくしゃくしており，夫はニューヨークで別の女性と会っている。この状況が二人の関係を着実に前進させていく。一度は失われ，切り離された過去が再接続されるのか。二人の物理的な距離も一気に縮まる。しかし，盛り上がった弾みで Donald が過去の出来事に具体的に言及したことが，皮肉にも Nancy の記憶を呼び覚ましてしまう。その結果，彼らの思い出話はお互いの記憶違い（彼女の記憶に今もなお強くこびりついていたのは，実は主人公と名前や外観が似ていた別の少年 Donald Bowers だった。その反面，Plant の存在は綺麗に忘れ去られていた）が土台になっていることが露呈されてしまい，彼らの関係は再び，そして今度こそ決定的に破綻する。このように，夢や希望と Fitzgerald 作品の関係を語る上でこの作品が重要なのは，記憶の凍結，言い換えれば記憶のペンディングを解除してしまったことが，破綻の直接的原因である点だ。とどめておいた記憶を解凍してしまうのは“The Long Way Out”とは異なるものの，夢や希望や記憶という主題において，この 2 つの短編が同じ線上に存在していることは明らかだ。また，過去を繰り返そうとする上で，あくまでも過去の完璧な再現を愚直に追求するあまり，再現の可能性を逆に破綻させてしまう。このような特徴は *The Great Gatsby* とも相通じるものがある。

おわりに

本論で見てきたように，夢や希望は Fitzgerald の作品を支える屋台骨のようなテーマだと言える。各々の作品で，それらがどのように描かれ，どのように作用し，そして最終的にどのような結末を招くのかは作品によって異なるが，いずれにしても，Fitzgerald 作品を語る際には外せないテーマである。また，夢や希望によって支えられている登場人物たちは，多くの場合，何かしらの到来を待っている。その待ち方がひときわ特徴的なのが，本考察が扱った“The Long Way Out”なのだけど，この作品とは異なり，大抵の作品は待った末に訪れるのは明るく幸せな未来と

いうことになっている。もちろん，到来を待つのだから，その対象は明るいものではなくては困るのだけど，この短編に限っては，どうも到来するのは明るいものとは言えそうもない。それどころか，待つこと，つまり現実的な結果を敢えて受け入れないことで，決定的な破滅を未然に防ごうとしているようなのだ。苦肉の策として，希望や夢が用いられている。この点が，この短編の興味深い点だと言える。このある種の“暗さ”を作者本人の当時の局面と単純に重ね合わせることで理解しつつ，“The Long Way Out”に描かれる希望や夢，そしてそれらの到来を生涯に渡って待ち続ける Mrs. King の姿は，総悲観的なものではなく，悲劇的な局面の中にも一筋の光り，それこそ希望や夢を見出せるのではないかと本論は指摘している。ここまで大雑把な議論になってしまったが，本論文の考察を経て，Fitzgerald の他の作品における夢や希望の役割についてより一層具体的に精査し，この作家にとっての光とは何かを解き明かすことが今後の課題となるだろう。

引 用 文 献

Breitwieser, Mitchell. *National Melancholy: Mourning and Opportunity in Classic American Literature*. Stanford UP, 2007.

Eble, Kenneth E. “Alcoholism and Mental Illness.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Edited by Jackson R. Bryer, U of. Wisconsin P, 1982, pp. 39–52.

Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. 1925. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott Fitzgerald*. Edited by Matthew J. Bruccoli, Cambridge UP, 2013.

———. “Author’s House.” 1936. *F. Scott Fitzgerald: A Short Autobiography*. Edited by James L. West III, Scribner, 2011, pp. 133–40.

———. “Babylon Revisited.” 1931. *The Cambridge Edition of the Works of F. Scott. Fitzgerald: Taps at Reveille*. Edited by James L. West III, Cambridge UP, 2014, pp. 157–77.

———. “The Long Way Out.” *Babylon Revisited and Other Stories*, Scribner, 2003, pp. 249–54.

———. “Winter Dreams.” 1922. *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald*. Edited by. Matthew J. Bruccoli, Scribner, 2003, pp. 217–36.

———. “Three Hours between Planes.” *The Collected Short Stories*. Penguin, 2000, pp. 573–78.

Lehan, Richard D. “The Romantic Self and Uses of Place.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Edited by Jackson R. Bryer, U of Wisconsin P, 1982, pp. 13–21.

Schiff, Jonathan. *Ashes to Ashes: Mourning and Social Difference in F. Scott. Fitzgerald’s Fiction*. Susquehanna UP, 2001.

West III, James L. W. “Fitzgerald and Esquire.” *The Short Stories of F. Scott Fitzgerald: New Approaches in Criticism*. Edited by Jackson R. Bryer, U of Wisconsin P, 1982, pp. 149–66.